Title	聖なるものの現象
Author(s)	大木，英夫
Citation	キリスト教と諸学 ： 論集, Volume21, 2006.3 : 99-104
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3233
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

聖なるものの現象

大木英夫

一、「聖」と真善美との関係

ヴィンデルバントは真善美という三つの理想目的に対応して、哲学の三つの基本学としての論理学と倫理学と美学とがあると言う。論理学は判断における真と偽、倫理学は意志および行為における善と悪、美学は芸術的創作及びその鑑賞における美と醜、その間を区別する価値判断という基本的事実から出発する。しかし、ヴィンデルバントは、真善美の上に、もう一つの理想目的があることを指摘する。それが「聖」である。「聖」はその三つの基本学のどれにも還元されない。いわば「聖」は真善美の三つのどこにも安住できない、それ自身の固有性において立つのである。それはたしかにその三つの理想のすべてと関係する、しかし、それら三つとは別個にして独自な理想である。この論文が書かれたのは一九〇二年、聖学院最初の学校聖学院神学校開設は一九〇四年、約百年前のことであった。明治学院は　時代の名を用いた、青山学院は地域の名を用いた。聖学院の「聖」がヴィンデルバントの「聖」の思想と関係があるかないか分からない。しかし、聖学院中学校の校歌の「真善美を聖にてすべくくり」は、明ら

かにその反映を示している。

この論文はヴィンデルバントの哲学論文集『プレルーディエン』に含まれているが、日本ではその中の重要な三論文を抜粋して一九二九年に岩波文庫版がでた。わたしはその中でも特にこの「聖」論文は注目に値すると考える。その論文出版からちょうど百年後の二〇〇二年春に「リクエスト復刊」されたが、それも既に売り切れている。そこに関心をもつ読者が今なおかなり居るということを示している。

二、Truncated Systemとしての日本近代文化

「聖」が真善美をその統合へと導く超越的理想であるという関係は、高橋里美という哲学者が「包越」という言葉を用いたが、その言葉によって捉え直すことができる。「聖」は真善美を包越する超越的理想である。しかし過去百年の歴史を振り返るならば、「聖」は人間と文化への規制力を失い、ダムが決壊したかのように世俗化の濁流が近代世界を押し流した。聖による真善美の総括は破れ、真善美を総合的に引き上げる目的的理想が失われた。そして、戦争によって拍車をかけられて自然科学分野、技術分野の発展は極度に加速され、倫理学分野は戦争によって壊滅的打撃を受け、また芸術分野における美的創造力の衰弱があらわとなりだした。「聖」を失った大学は、そのユニヴァーシティ（unus［一つ］＋vertere［向かう］）はマルティヴァーシティになり、総合力を失ったまま、文化総合の課題と取り組むことなど思いも及ばぬこと、社会変動の津波にさらわれている。

「聖」の概念をとりあげることにおいて哲学者ヴィンデルバントその人自身は、今日の特に日本の最近の大学人一般と際立った違いを示している。今日の日本では、真善美を包越する「聖」への感覚をもつ知識人をほとんど見出

すことができないからである。

わたしは日本近代文化を Truncated System と呼んだことがある。それは円錐の頭部を切り取った形である。人間は霊（プニューマ）と心（プシュケー）と体（ソーマ）の三次元組織をもっている。現代文化を人間論的に捉えるならば、霊的次元を切除（truncate）された形である。「霊性」（spirituality）という言葉を――それはここで用いる「霊性」とは異なる意味のものであるが――日本の知的世界で最初に用いたのは鈴木大拙の『日本人の霊性』であった。しかし、日本の知的世界では、理性の上に霊性があるという説は、ほとんど理解されない。音痴が音楽を分からないようなものである。霊的音痴である。その霊的次元の切除が「聖」への感覚を喪失させた。しかし、「分からない」ことは「無い」ことではない。日本人はエルとアールの違いが分からない。しかしその違いはある。音痴が美しいメロディが分からないとしても分かる人もいる。音痴は音楽大学に入ることができない。しかし、日本の大学からは、毎年膨大な数の霊的音痴人間が社会に排出されて行く。今日の日本社会の深い崩壊は、ヴィンデルバントの目で見れば、「聖」なるものの喪失から出てきたと見えるであろう。鈴木大拙もそう見た。

三、チャペルにおける「聖」の現象

そのような日本の知的状況の中で、今回の大学チャペル完成は、一個の「出来事」であった。オックスフォード、ケンブリッジ、それぞれのコレジはチャペルをもっている。日本では大学がチャペルを持つ意味が分からない。しかし聖学院大学は日本の大学として敢えてチャペルをもった。それは「聖」の現象である。この大学チャペルという聖堂において目に見えない「聖」が目に見える形となって顕現された。設計者香山教授に心からなる感謝を捧げ

たい。このチャペルそれ自体が美学と工学との見事な結婚であるだけでなく、それは聖学院百周年にあたり聖学院大学が「聖なるもの」の再生を促す出来事でもあるからである。

二つのことを思う。「聖」における文化超越と文化総合である。第一は、「聖」の現象において真善美を包越する「超越」が分かるということである。美は崇高な憧れである、「聖」の次元への精神の高揚である。その憧れは「聖」と結びつくとき、祈りとなる。それがないと、真善美はばらばらになり、そしてそれぞれ傲慢となる。バッハは作曲が完成したあと、最後の余白に"Soli Deo Gloria"（神にのみ栄光あれ）と書いた。真善美に於ける偉大な達成は、「聖」との結びつきにおいて謙虚さを帯びてくる。「聖」なるものはまさに真善美を限りなく引き上げると同時に、その探求を限りなく謙虚へと結びつけるのである。そのようにして「ピエタス」と「スキエンチア」との結合も起こるのである。「聖」の感覚とは、超越を憧れる、かぎりなく憧れる、しかし、バベルの塔のように天にとどこうとするのではない、神の如くなるのではない、謙虚になる、そこに真善美を引き上げるより高次なものを仰ぐのである。それがこの礼拝堂における聖なる「包越」の感覚である。

第二に、「聖」による文化総合の理念、そして新しい共同体の形成という課題である。「建物がたつと土地も変わる」とルイス・カーンは言う、それだけでない、この礼拝堂に入ると人間も変わる、文化総合のヴィジョンが与えられる。ここには人間の変化、文化の変化への神秘な促迫がある。人間は人間としての全体性（whole = heal = holy）の回復、近代文化によって病む人間の魂のいやしがあるということである。

このドイツの哲学者がもっているような「聖」の感覚を、日本の大学は西欧文化の影響を受け入れながら、それを排除した。日本における霊性の退化はまず大学に起こった。南アジアの大震災と大津波で、象は被害を受けなかったという。それは本能的に異変を感じ取っていたからだと言われる。人間はその感覚を失った。そして大被害

を被った。しかし、人間が人間として持つべきもっと重要な感覚、つまり今日科学技術だけの日本近代化の問題がいかに危険をはらむものであるかを、とくに大学人は感じとるべきではないだろうか。

霊的退化は、動物的退化ではない、それは大学における知的習慣がもたらした一個の生活習慣病的結果である。その退化は自然的ではない、そうではなくて、知的傲慢がもたらした退化である。霊性を不能にするのは、自然的なことではなく、意志的なこと、傲慢という悪意志によるのである。それが文化の総合を不可能にし、そして真善美がアンバランスに分解して今日に至った。二十世紀は世界大戦というその巨大な文化災害を経験した。それはこの度の自然災害よりもはるかに巨大な人的犠牲をもたらしたことを知らねばならない。

しかし、この聖堂に入って上を仰ぐと、それは親鳥が翼を広げるように永遠の翼の中にいだかれるような思いを懐かせられる。近代文明に抑圧され退化した魂がその翼のもとで癒されるのである。このチャペルで礼拝のときをもつことによって、魂の中に近代文化に抑圧された霊性がよみがえる、そして孵化する、あたかもそのようにしていのちを取り戻す。

そこに聖と美の結びつきがある。「聖」に美が身を伸ばして接する。中世人がドームに「天国」を仰いだように、聖なる美は、死に瀕したような現代人の魂を永遠の思いに甦らせる。この聖堂の中で、そのようなことが不可能ではない。上から来臨する「聖」、それと美の憧れとの邂逅の場である。そこで霊性は知性の傲慢から救い出されるであろう。そこから新しい人間が産み出されるであろう。聖学院大学から新しい文化総合が始まる。聖学院大学礼拝堂は、人間と文化の再生の場となる。それは不可能な夢だろうか。聖学院大学が聖学院大学になること、そこに冠された「聖」を自覚すること、それは不可能な夢ではない。その夢が実現するとき百年の戦争の世紀の克服が起こ

り出すであろう。そのことをこの年頭に当たり、われわれは深く自覚したいと思う。

（二〇〇五年一月七日、聖学院大学新年研修会講演）